統 合 講 義 （ 炎 症 学 ）

【単位数：１単位，授業15コマ（定期試験含まず）】

１　科目責任者

早稲田勝久　教授（医学教育センター）

科目担当者

髙村祥子　教授（感染・免疫学）

２　教育目標

（１）　ねらい（Ⅲ-３-ｃ）

① コンピテンスである「医学知識と科学的探究心」を理解するため，疾病の病院・病態・治療につながる基礎医学的知識から臨床につながるところまでを集中的に学び，それにより“プロフェッショナリズム”育成につなげる。

② 前学期及び後学期の講義で習得した免疫学，生化学，微生物学・基礎感染症学や病理学などを横断的につなげて考える力を養う。また，急性期及び慢性期の感染症病態を学ぶことで救急医学・臨床感染症学など，将来学ぶ臨床医学への登竜門として縦断的な考え方を習得する。さらに，動脈硬化などにも関連のある脂質蓄積による慢性炎症発症機序やMASHなどの疾患についての知識を習得する。

③ 臨床学の講義を聞いて2学年次で理解できるレベルまで基礎知識を高めるとともに，実際の病気がどういうものなのかを体感し，それにより自発的に勉強する気持ちを高める。

（２）　学修目標

① 『炎症』の定義や，各疾患の発症メカニズム・病態を説明できる。
② 『創傷治癒』について説明できる。
③ 細菌の形態や微生物学的特徴について説明できる。
④ 抗菌薬の作用機序について説明できる。
⑤ 急性炎症病態の代表的疾患として，敗血症や丹毒について理解し説明できる。
⑥ 慢性炎症の代表的疾患として，結核やMASHなどについて理解し説明できる。

３　成績の判定・評価

（１）　総合成績の対象と算出法

	成績対象	割合	方法・コメント
定期試験	○	100％	原則的に多肢選択問題とする。
態度	○	—	受講態度が著しく不良の場合は最大10点減点をする。なお受講態度にはレポートなどの提出状況も含む。

出席：　定期試験を受験するためには欠席率が3分の1を超えてはならない。

（２）　合格基準

評価対象の合計が60％以上（又は60点以上）で合格とする。

（３）　再試験・再評価の方法

上記（2）で総合成績が60％未満の場合は，再試験を実施する。再試験は定期試験に準ずる方法で実施する（60％以上で合格）。

（４）　課題（試験やレポート）へのフィードバック

定期試験の成績についての総括を学内メールで実施する。

これにより理解が不十分な項目について再確認を促すとともに，定期試験で不合格となった者は再試験に備える。

4　教科書

書名	著者名	出版社	教科書として指定する理由
指定教科書なし 必要な授業資料をAIDLE-Kに掲示する。			

5　参考図書

書名	著者名	出版社	参考図書とする理由
免疫と「病」の科学	宮坂昌之， 定岡　恵	講談社	単行本で初心者にもわかりやすい。炎症学のトピックスが網羅されている。図も多用され短時間で理解しやすい。
分子細胞免疫学(原著第10版)	アバス， リックマン， ピレ	エルゼビア・ジャパン	敗血症や結核に関する記述がある。

6　準備学習（予習・復習）

○　本講義や免疫学，病理学，微生物学，生化学などの教科書，参考図書の中で関連しそうな範囲に改めて目を通してどのような事項が取り上げられそうか予想し，興味を惹いた項目について記載内容を読んでおく(1日あたり0.5時間)。

○　AIDLE-Kに挙げられている演習問題をあらかじめ解いておき，分からない点を把握したうえで授業に臨む(1日あたり0.5時間)。

○　講義で配付された資料について講義後に内容を再確認し，以降の講義に臨むこと(1日あたり1～1.5時間)。

7　授業計画

(1)　講義の方法

大教室での知識伝達型の講義が主体であるが，講義中，講師との質疑応答などのアクティブ・ラーニングを可能な限り導入する。また，アドバンス授業として最先端の研究内容の話や『炎症』にまつわるよもやま話を中心とした講義も行う。これまでの座学の集大成やさらなる発展的な内容もあるため，自学自習の習慣をつけるため授業まとめレポート(感想含んで)を提出させるなど，能動的な学習体系を構築できるように導く。

(2)　講義の内容

臨床科の講義を基軸とし，その内容を理解するのに必要な内容の基礎研究者の講義を取り入れる。また，AIDLE-Kなどに提示した演習問題なども自主学習資料として取り入れ，個人やグループで解かせて質疑応答の機会を設けることにより問題解決能力を身に着けさせる。さらに授業まとめレポートを提出させ，理解を深めさせる。